

『露色随詠集』について

—西行歌との関わりを中心として—

中西 満 義

はじめに

鏝也の家集『露色随詠集』は、卷二のみの残欠本であるが、そこに収められている六三三首（他人歌三五首を含む）の中には中世和歌の世界を考える上で看過しえぬ諸問題を提示しているものが少なからず認められる。中でも、新古今時代を代表する歌人藤原定家との交渉を示す贈答歌などは、『明月記』の記事とあわせて夙に注目されて、論じられている。しかし、鏝也、および『露色随詠集』のそれ以外の詠歌についての論及は稀少である。

鏝也およびその家集『露色随詠集』を本格的に取り扱った研究としては、冷泉為臣氏（注1）による翻刻解題を嚆矢として、石田吉貞氏「鏝也と露色随詠集」（注2）がある。石田論文は、先の冷泉氏解題を受けて、広く『玉葉』、『吾妻鏡』等にも資料を求め、主に伝記面に関する新しい検討を加えられたものである。ただ、この石田論文は、「鏝也は宋人か」という疑問を考察の主眼とされたためか、鏝也の歌に対しては、「新古今的な新鮮な叙景や艶麗な抒情をねらっていることは認め得るが、優艶・繊細等、新古今の歌の美的特色とするものが稀薄であるために、田舎者が流行を追おうとしたような、一種ちぐはぐなものが感じられる。いや、もっとはつきり言えば、かれの歌は、

新古今風であるとかないとかいうよりもっと以前のもの、すなわち、和歌としての基礎的なものが欠けているように感じられるのである」といったように、消極的な評価しか示されなかった。

確かに、石田氏の指摘されたような鏝也の歌に対する評価は、先掲冷泉氏解題以来、『露色随詠集』の翻刻に付された解題や、辞典類の項目説明（注4）にも示されていることで、概ね首肯できる。

しかし、鏝也は勅撰集歌人という名誉を与えられてもいる。鏝也の没後間もない頃に成った藤原定家撰の『新勅撰和歌集』（巻十・釈教歌）には、「如来無辺誓願仕の心をよめる 鏝也法師」と詞書されて、

かずしらぬちぢのはちすにすむ月を心のみづにうつしてぞ見る

（新勅撰和歌集・六一〇）

が一首入集している。撰者である定家との交渉がただに歌道のみに残まるものではなかったとはいえ、その親密な関係ゆえに入集したと直ちに考えることもできない。和歌に対する矜持を持っていた定家が、歌の善し悪しを判断することなく、勅撰集入集歌の撰定を行ったとは思われない。

実際、右の一首は、密宗所立五大願の第四である「如来無辺誓願事」（無邊の如来に奉仕せんと誓願）（注5）を巧みに詠み込んでいる。数

限りなく多くの如来を「かずしらぬちぢのはちすにすむ月」にたとえ、無辺の如来に奉仕せんとすの誓願を行うわが心を清浄澄明な「(心)の(みづ)」と表現して、その心に諸々の如来の姿(相)を想い描くことを詠んでいる。

また、右の『新勅撰和歌集』入集の場合と状況は似ているが、寂延の撰になる『御裳濯和歌集』にも鏝也の歌は二首採られている。鏝也と撰者である寂延との関係については後述するが、つぎに示す二首からしても、鏝也の歌を稚拙なものとして片づけてしまうことは出来ないように思われる。

わがいりし心のほかのすみかな花にとはるみよしののおく

(御裳濯和歌集・春中・一二八)

としごとにと山の花に春くてまだみよしののおくをみぬかな

(御裳濯和歌集・春中・一七三)

右の二首を詠んで、先ず気付くことは、西行和歌との著しい類似で、発想・措辞はもとより、表現内容においても西行和歌と相通するものが認められることである。吉野山の奥を尋ね求める自身を詠んだ西行の歌としては、

よしの山こぞのしをりのみちかへてまだみぬかたのはなをたづ

ねん (聞書集、二四〇)

がよく知られているが、そのほかにも「吉野山」と「奥」を詠み込んだものとしては、

いざこころはなをたづぬといひなしてよしののおくへふかくい

りなむ (松屋本山家集^{注6)})

ときはなるはなもやあるとよしの山おくなくいりてなほたづね

みむ (聞書集、一八六)

などを見出だすことができる。さらに、鏝也の歌には

よしの山おくをもわれぞしりぬべき花ゆゑふかくいりならひつ

つ (聞書集、一八七)

たにのまもみねのつづきもよしの山花ゆゑふまぬいはねあらじ

を (聞書集、一八〇)

と、吉野山の奥を尋ね求める理由を「花ゆゑ」と詠む西行の心と同一なものが詠まれており、西行的和歌世界があらわに表現されている。

右の『御裳濯和歌集』入集歌二首を見ても明らかのように、鏝也の歌には西行歌と酷似した表現が認められるのだが、鏝也に言及した従前の論稿では、前述したように、家集に贈答歌を収め、なおかつ『明月記』にその名を見せることから、定家との関係が注目されてそれが中心的に取り扱われていた。それにともなって彼の和歌についても定家の影響を指摘する傾向が見受けられたのであるが、『露色随詠集』の鏝也の歌を通観すると、西行歌の影響下にあると思われるものも多く認められる。そこで本稿では、『露色随詠集』に見られる鏝也の歌の特質を西行歌との関係において、発想・措辞・表現内容などに注目して指摘してみたい。

I

『露色随詠集』には「名所歌」四十六首が収められている。これは定家ら十名の歌人が出詠した『最勝四天王院障子和歌』に倣ったと思われるもので、題となつてゐる地名や順序もほぼそれと一致する。「おそらく定家あたりから御障子歌のことを聞いてよんだもの^{注6)}」と考えられるが、これなどは同じく『露色随詠集』に収められている「古歌をとぶらうて」などとともに鏝也の和歌を学ぶ姿勢の一端を示すものと見てよいだろう。鏝也の『古今和歌集』をはじめとする古

歌に対する強い関心や積極的に当時の和歌の流行を取り入れようとした形跡は、その結果はどうであれ、『露色随詠集』の歌に見て取ることができる。『露色随詠集』は、この「名所歌」四十六首の他にも、相当数の歌枕・地名歌を収めている。いま、試みにその名を列記すると、つぎのごとくである。

吉野 …… 四十七例（うち、一例「吉野川」）
 明石 …… 七例
 和歌の浦 …… 六例
 伊勢の浜荻 …… 五例（うち、一例「はまをぎの」）
 山田の原、二見浦（渚） …… 各四例
 伊勢島、住吉、更級（「姨捨山」を含む）、越路（「越の白山」を含む） …… 各三例
 伊勢の海、出雲（八重垣）、石清水、春日野、神路山、清見が沖（渚）、飾磨、信夫の里、高野、難波江、初瀬山（川）、宮城野、宮川、武蔵野、小野（の篠原） …… 各二例
 朝熊社、淡路島山、阿波の鳴門、青根が峯、五十鈴川、妹背の山、いらが海、岩倉の谷、うつの山、えぞ、音羽川、賀茂、北山・西山、くらぶ山、志賀、静原（大原）、白河（山城）、白河の関、鈴鹿川、須磨、隅田川、末の松山、外の浜、高砂、玉津島、とぶひの杜、奈良の京、はこやの山、はその杜、深草の里、まの萩原、三笠山、みみなし山、三輪山、よもぎが島、鷺のみ山、度会、麻生の浦 …… 各一例

その他、「しきしま」「もろこし」あり。
 ここでは「名所歌」と一括された四十六首の地名は除いてある。
 贈答歌の他歌人のものも同じ。また、固有名詞と確定し難いものも除いた。

これによって第一に注目されるのは、吉野を詠んだものが群を抜いて多いことである。『露色随詠集』における「吉野」詠は「名所歌」の一首を入れて四十八例認められるが、その大半は「閑居百首」のもので、鏝也の吉野への一方ならぬ愛着を顕著に示している。そして、それとあわせて注目されるのは、伊勢の浜・山田の原・二見浦・伊勢島・宮川・神路山など、伊勢の歌枕・地名歌がきわめて多いことである。この最高の用例を数える「吉野」詠と伊勢の歌枕・地名歌は、鏝也の行動圏と密接に関係するもので、実際の体験に基づいて詠出されたことが考えられる（それぞれについては後述する）。また、これらのほかにも、措辞の点で注目されるものや、用例の稀少さにおいて見逃せないものも少なくない。

およそ、新古今時代における歌枕・地名歌は、もはやその土地の実態を離れたところで詠出されたものがほとんどであったが、裏を返せばそれを詠むためにはそれまでに蓄積されてきた古歌に対しての知識が必要であったわけである。形象化されたイメージを逸脱することなく、なおかつそれまでの歌にない新しいものを付与する、ということが歌枕・地名歌を詠む際の歌人たちにとっての課題であったと言えるだろう。そのような意味で、『露色随詠集』の歌枕・地名歌を取り出してそのいくつかを具体的に検討することは、鏝也の歌に対しての評価をくです上で有効であるだろう。以下、二、三の歌枕・地名歌を取り出して、それを見て行きたい。

つゆにやどる月にこころのうつるまにうづらたつなりみやぎの
のはら 二四

右歌は「月百首」に収められている一首であるが、その第五句に使用されている「宮城野の原」がまず注目される。「宮城野の原」は、^{注(9)}稲田利徳氏の指摘されているように、

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風立ちぬ宮城野の原

(西行法師家集・一七〇)

はしがえのつゆためずふく秋風にをしくなりみやぎののは
ら (山家集・四三〇)

という西行歌以前には見られないもので、鏝也もそれを取り込んだものと思われる。殊に西行の「あはれいかに」歌は、『御裳濯河歌合』(十七番左)に自撰し、また『新古今和歌集』(秋歌上・三〇〇)にも採られており、鏝也自身「宮城野の原」という表現が西行のものであるということは了解していたと思われる。もともと、この「宮城野の原」という表現は、^{注(10)}新古今時代の歌人たちの好尚にもなったもののようで、良経、家隆、そして鏝也の歌の師であったとされる定家などの歌にも西行歌の影響を受けたと思われる作が認められ、鏝也の歌が直接に西行歌に倣ったと見ることはためらわれる。鏝也の「うづらたつなりみやぎのはら」という下句は、むしろ、

風ふけばこはしが枝にたまちりてうづらなくなりみやぎののは
ら (隆信集・一五二)

との類似が指摘できるが、『露色随詠集』には他にも、

つゆにすむ月のさやかにかげみえてしかなきわたるみやぎの
はら 三一六

があり、鏝也の歌では「露」と「月」と動物(鶉、鹿)の取り合わ

せが特徴的である。中でも、「宮城野」を詠んだ歌において「月」を素材として取り込んだものは、

小萩はらまだ花さかぬみやぎののしかやこよひの月になくらん

(千載和歌集・敦仲・二一八)

宮木のの風まちわぶる萩のえの露をかぞへてやどる月影

(拾遺愚草・一八五〇)

たび衣きつつなれても露ふかき宮城が原の秋の月かげ

(俊成卿女集・七五)

など少なく、「宮城野の原」に秋の代表的景物である「月」を添えていることは鏝也の歌において注目される。

二四番歌が「月百首」中の一首であり、そして三一六番歌が「八月十五夜、人人あつまりて、よしのがはいはなみたかくといふ歌をかみにおきて、ひとときのうちによみはべりしなかに」と詞書された内の一首であることからして、鏝也の場合は月歌を詠むことが前提としてあったわけだが、それにしても月歌を詠む際に「宮城野」という地名が選ばれたことは重要である。

この「宮城野の原」と「月」との結合は、鏝也が歌枕の伝統的詠風にとらわれることなく、自由な態度で作歌していたことを示していると考えられることも可能であるが、また、新古今時代全般の歌材の趨勢を反映しているとも見ることもできる。しかし、このことは、むしろ鏝也の西行歌摂取の現れと見るのが至当であろう。例えば、三一六番歌は、

三笠山月さしのぼる影さえて鹿鳴きそむる春日のの原

(西行法師家集・二六三)

に触発されて、そこに表現されている世界をそのままに取り込み、「春日野の原」を「宮城野の原」に置き換えたものであるように思わ

れる。

「春日野」は、

かすがののわかなつみにや白砂の袖ふりはへて人のゆくらむ

(古今和歌集・貫之・二二)

春日野のしたもえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪

(新古今和歌集・国信・一〇)

など、早春の景物によって詠まれることが多かったのであるが、右の西行歌の場合は、「三笠山」を配することによって「月」を自然なカタチで導き出し、「月」と「鹿」を交えた秋歌に仕立てることに成功している。そして、その際に「野の原」という措辞は、その情調を一層盛り立てるために効果的な役割を果たしているだろう。

おそらく、鏝也はこの西行歌によって、蕭々とした秋の野原のイメージにおいて通い合う「春日野の原」を「宮城野の原」に詠み換えたのであろう。「野の原」という共通した措辞もその詠み換えを容易にした要因と思われる。

また、二四番歌の第二句「月に心」は、

ゆくへなく月に心のすみすみではてはいかにかならんとすらん

(山家集・三五三、西行法師家集・二二五)

このはちれば月に心ぞあらはるるみやまかくれにすまんとおもふに

(山家集・四九五)

ながめつつ月にこころぞおいにける今いくたびか世をもすさめ

ん (西行法師家集・一九八)

など、西行歌に複数の用例を見出だし得る措辞で、ここにも西行歌の影響が少なからず認められ、鏝也の「宮城野の原」を詠み込んだ月歌二首からは西行歌を摂取したと思われる痕跡が明瞭に窺えるのである。

ちなみに、『露色随詠集』の中から「野の原」という措辞を体言止めで用いているものを拾い出してみると、「宮城野の原」の二例のほか、「武蔵野の原」の二例（うち、一首「名所歌」のもの）、「春日野の原」、「まぐずはの原」の各一例があげられる。総じて鏝也の歌には体言止めが多く使用されていて、それが鏝也の歌の特質の一端を示すものと言えらるのだが、右の「野の原」という措辞を好んで用いたこともそれを物語っている。特に、「春日野の原」は、前掲西行歌以前では『相模集』にしか見られないもので、注目される。ただ、鏝也の、

われながらつまこもれりとなのりつつけふやかさなむかすがの
のほら

五四八

については、西行歌とともに、『最勝四天王院障子和歌』の「春日野」題の二首を念頭に置かなければならないが、いずれにしても、鏝也が措辞に対してかなりの心配りをしていたことは了解される。

II

つぎに、先掲歌枕・地名の中から用例として稀少なものについて、まず「静原」を取り上げて見て行きたい。

「静原」は、

古くは志津原とも書く。鞍馬と大原の中間山地にあたり、静原川上流部流域に位置する。西は薬王坂を越えて鞍馬に、東は江文峠を越えて大原に至る。四方を山林に囲まれた洛北幽邃の地。

(府地誌)^{注64}

と説明されている所で、鏝也はそれを、

おとにきくおほはらのおくのしづはらもすまむこころにうつし
てぞ見る

一一五

と詠んでいる。この「静原」を詠み込んだ歌は、右歌のほかには西行歌の、

山がつの住みぬとみゆるわたりかなふゆにあせゆくしづはらの里
(山家集・一五四八)

を見出だすことができ、^{注5)}その影響関係は十分に考えられる。右の西行歌は、『山家集』巻末百首歌の「雑十首」のうちの一首であるが、『夫木和歌抄』巻第三十一にも、「しづはらのさと、山城」として採られている(一四八〇三番)。「夫木和歌抄」は、また、巻第二十二の「原」題の「しづはら」に、

六帖題、原、新六二 信実頼臣

やどしめてなに山がつのしづはらやしづかなるべきあたらずまひを

を載せている(九九五九番)が、寛元二年頃に成立した『新撰六帖題和歌』(第二帖、五九九)に収められている右の信実歌も西行歌を念頭に置いて詠まれたものかも知れない。

西行歌や右の信実歌によっても知られるように、「静原」という地名から喚起されるイメージは、地理的にも近接していたこともあつてか、「大原」のそれと同一のもので、鏝也が「おほはらのおく」と表現したのは、彼が「静原」を「大原」の一部と見做していたためと思われる。

「大原」(大原の里)は隠遁者の別所として有名で、鏝也の歌の初句「おとにきく」も、隠棲の地「大原」という認識に基づいて置かれたものと思われる。『山家集』には、「入道寂然、大原に住み侍りけるに、高野よりつかはしける」という詞書のもとに、「山ふかみ」を初句に据えた十首(一一九八―一二〇七)と、その返しとして寂然の、

あはれきはかうやときみもおもひやれ秋くれがたのおほ原のさと

すみがまのたなびくけぶり一すぢに心ばそきは大原のさとなど、「大原の里」を結句とする十首(一二〇八―一二一七)を収めているが、この二人の贈答も鏝也の意識するものであったのかも知れない。

そして、鏝也の歌の結句「うつしてぞ見る」という措辞は、

たたへおくこころの水にすむ月をあかしのなみにうつしてそ見る
(松屋本山家集)

などの西行歌にも見出させるもので、「心の水」という措辞とともに西行歌の特質を表しているものと言える。加えて、「すまむこころにうつしてぞ見る」という下句全体は、

山ふかくさこそ心はかよふともすまであはれは知らんものかは
(新古今和歌集・一六三二)

の西行歌の心を踏まえての表現であるように感じられる。このことから、鏝也は、ただに西行歌の措辞だけでなく、西行の生活の形態やその心境までを倣おうとしていたであろうことが窺われ、西行を隠遁者の典型として追慕するような鏝也の姿勢が認められるのである。

また、それと同じようなことは、「高野」詠についても言える。『露色随詠集』には二首に「たかののおく」という措辞が見出だせる。

うかれいでてくものあなたにまじりなれたかののおくのたにのすずはら
一一二二

右歌は「閑居百首」のもので、そこには願望表現によって「たかののおく」を強く志向する心が詠まれている。石田氏は「閑居百首」を「閑居を望む意で、自分の閑居生活をよんだ歌ではなく、吉野へ

の隠遁を望んだものが多い」と解釈されているが、右歌も場所とは異なるけれども、「高野」への隠遁の志を詠んだものと一応は理解される。しかしその際、氣に掛かるのは結句の「たにのすずはら」である。この「すずはら」は、固有名詞であるのか普通名詞(篤・篠が生い茂った原)であるのかは判然としないが、いずれにしても用例の乏しいもので、幾分なりとも鏝也が高野の地理、地形に通じていたことを示しており、鏝也の「高野」への隠遁の志はかなりの具体性を持ったものであったように思われる。

ここで、もう一首の「高野」を詠んだ

人しれずふかくすみいるころかなたかののおくのありあけの月 一一六

を見ると、実際に「すむ」(住む、澄む)ことによってもたらされた感慨を表出しているようで、鏝也には「高野」に「住む」という体験があったように思われてくる。鏝也が「高野」に住んだことがあったか否かは、即座に結論を導き出せる問題ではないが、右の二首はそれを解く上で参考になるだろう。

ともあれ、右の二首は、西行にとっても非常に馴染みの深い土地である「高野」を詠んでいる。「高野」は、西行の修行の中心地ともなった所で、歌や詞書などからそこでの生活を窺うことができるが、右の鏝也の二首は、

高野より京なる人につかはしける

すむことは所がらぞといひながらたかのはものあはれなるかな (山家集・九一三)

や、また、

おもはずなる事おもひたつよしきこへける人のもとへ、高野よりいひつかはしける

しをりせでなほ山ふかく分入らんうきときかぬ所ありやと (山家集・一一二一、西行法師家集・五四〇) など、修行のため心を澄まして住む「高野」での西行の感慨に合うものがあるだろう。中でも、鏝也の一一六番歌の上句「人しれずふかくすみいるころかな」は、西行歌の傍線部と酷似している。このほか、鏝也の歌の措辞に注目すると、その端々に西行的表現を認めることができる。

まず、一二二番歌初句の「うかれいでて」の「うかる」は、

うかれ出る心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにかはせむ (松屋本山家集、九二六)

など、西行が好んで用いた語で、西行の資質と深く関わるものである。鏝也は、その「うかる」を、一二二番歌以外にも、

しのびかねうかれいでぬる我がころなにのくさばにやどをかるらん 三三六

うかれいづるころのゆくへたづぬればあさぢがはらのゆきのしらくも 三五三

うかれいでてくさばにやすむふくかぜにつゆとけぬべきわがころかな 三八四

と、多用している。右の三首の傍線に示した使われ方からしても、西行歌に特徴的な措辞を鏝也が積極的に取り入れていたことは明らかであろう。

また、一一六番歌の「ありあけの月」は、新古今的表現の一つに数えることができるが、

夜もすがらひとり深山の槇の葉にくもるもすめる有明の月 (新古今和歌集・長明・一五二三)

と同様、「深山暁月」を詠んだものであるだろう。ただ、鏝也の歌の

「ありあけの月」には、「たかののおく」という表現からも窺われるように、宗教的な意味合いが込められているだろう。

ゆきふかしみやまもふかしふかくすむおくのころはありあけの月
一五四

この歌も同様であるが、先の一一六番歌は、修行して心を澄ます境地の象徴として「ありあけの月」を捉えているだろう。このような詠み方は、西行の『法華経』『寿量品』の「得入无上道、速成就仏身」を詠んだ、

わけいりしゆきのみ山のつもりにはいちしるかりしありあけの月
(聞書集・一七)

や、同じく『法華経』の「寿量品」^{注22}を詠んだ

鷲の山くもる心のなかりせば誰も見るべき有明の月

(西行法師家集・六一三)

などのそれと相通ずるものがあるだろう。「聞書集」の歌は「速成就仏身」の象徴として、また、『西行法師家集』の歌は霊鷲山で法を説く「釈尊」の象徴として「ありあけの月」が詠まれている。

右に掲げた鏝也の二首(一一六、一五四)は、ともに「閑居百首」に収められており、一応は「深山曉月」を詠んだものと解釈して差し支えないが、むしろ『法華経』などの經典を念頭に置いた釈教歌として読むことが適当であろう。本稿では鏝也の思想的な側面については特に論じることはいないが、鏝也にはかなり熱心に『法華経』などの經典を学んでいたと思われる形跡が認められ、注目される。一例を示せば、「月百首」の中の經典の文句を題としているものがそれ、

住霊鷲山及諸住所

ながむればわがいほりよりすみのぼるわしのみやまの月のおも

かげ

豈離伽耶別求常寂

ながむればうきよのほかここにこそかしこころひとつにすめる月
かげ
八〇

などは『法華経』の「寿量品」を詠んだものと思われる。「住霊鷲山及諸住所」は、偈の「常在霊鷲山及餘諸住處」^{注23}という一節を題に据えたものと思われるが、「豈離伽耶別求常寂」もまた、唐の湛然の著述である『法華文句記』卷九下(「釈壽農品」)に「故經云我土不毀常在靈山。豈離伽耶別求常寂。非寂光外別有袈裟」^{注24}(故二經二云ク、我が(淨)土ハ毀レズ、常ニ靈山ニ在ル。豈伽耶ヲ離レテ別ニ常寂ヲ求メンヤ。寂光ノ外別ニ娑婆有ルニ非ズ)とあるのを詠んだもので、経では「常在霊鷲山……」以下の箇所に対応する。『法華文句記』は、天台大師が『法華経』を注釈した三大部(天台三大部、法華三大部とも)の一つである『法華文句』を注解したもので、鏝也がこのような注釈書に親しんでいたとすれば、思想的にも注目される。

以上、「静原」と「高野」という地名に注目して、鏝也の歌と西行歌との関係を見てきたが、その都度指摘した点とあわせて、鏝也の西行歌撰取の方法が少し明らかになったと思う。先にも述べたが、鏝也のそれは、単に表現に留まるものではなく、歌の内容にまで及ぶものであると言えよう。鏝也は西行歌の発想や措辞をかなり大胆に取り入れながら作歌しているが、それは模倣というよりも西行が表現したものを自身で再確認する作業であったと思われる、そこには隠遁者の典型とも言える西行を追従する鏝也の姿勢が窺われる。

III

西行が出家後まもなくの頃伊勢の地に赴いたことは、

世をのがれて伊勢のかたへまかりけるに、すずか山にて

すずか山うき世をよそにふりすていかに行くわが身なるらん
(山家集・七二八)

という歌によって知られているが、その後も西行は何度か京と伊勢の間を往復したようで、殊に晩年の数年間は伊勢の地に移り住み、京を中心とした騒ぎをよそながら見ていた。

内宮のかたはらなる山陰に、庵むすびて侍りける比

爰も又都のたつみ鹿ぞすむやまこそかはれ名は宇治の里^{注四}

(西行法師家集・六〇六)

西行が伊勢の地で庵を結んだ場所としては幾つかの地名が挙げられているが、この「宇治の里」もその一つである。この歌が、

わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり

(古今和歌集・九八三)

を本歌として成り立っていることは明白であるが、この歌のように、喜撰歌の「うぢ山」(山城国)を「爰も又都のたつみ」とうけて、内宮(皇大神宮)鎮座の地である度会郡宇治里を詠み込んだものは他に見られない。「都のたつみ」という表現は、文字通り都(京洛)を中心に、そこを起点とした方角を指示するわけであるから、それも頷ける。少しく「都のたつみ」の用例を確かめてみても、

河霧のみやこのたつみふかければそこもみえぬうぢのやま里

(堀川百首・七八三、匡房)

あさとあけて宮このたつみながむればゆきのこずるやふかくさのさと
(六百番歌合、五五〇、家房)

などと、山城国以外の土地を指すものは見当たらない。ところが、『露色随詠集』にはつぎのような歌が見出させる。

これもそのみやこのたつみしかもすむやまのなおなじしほのい

ほりぞ

一四一

この歌には西行歌のように「宇治の里」は詠み込まれていないが、これも喜撰歌を本歌にしていることは明らかで、

みよしののおくのおくもなほ花もありやまだのはらはただすぎのかげ
一四二

はるばるといくたにみねをわけこえてよをわたらひにいほむすぶらん
一四三

と、その後に置かれている歌からしても、「やまのなおなじ」とは内宮鎮座の地である「宇治の里」を指しているものと考えられる。鏝也の歌は、喜撰歌の第二句と第三句をほとんどそのまま用いて、それに西行歌の発想を取り入れることで成り立っている。

この例によっても、鏝也は西行歌に相当親しんでいたことが理解されるのだが、ここでもう一つ留意しなければならないことがある。それは、鏝也の歌は、単に想像によって詠まれたのではなく、自身の体験をもとに詠まれている、ということである。

先の歌は喜撰歌と西行歌とを繋ぎ合わせることで詠み得たわけであるが、西行と同様な「内宮のかたはらなる山陰に、庵むす」ぶというような実体験がなければ、それも可能ではなかったろう。換言すれば、鏝也自身が「宇治の里」に「しばのいほり」を結んでいなければ、右のような歌を詠む意味がまったくなかったのである。先の歌には、西行が庵を結んだのと同じ所に自身も庵を結んでいるということによる感慨が込められているだろう。

およそ、鏝也が伊勢の地に住んで、そこを詠もうとした際、先人として多くの伊勢の歌枕・地名歌を残した西行の存在は大きかったであろう。鏝也にとって、西行が詠み置いた伊勢の歌枕・地名歌は十分に意識するものであったと思われる。先の「山田の原」と「度

会（の庵）を詠んだ二首も、歌の出来とすればさほどではないが、吉野から「はるばるといくたにみねをわけこへて」伊勢まで辿り着いたという内容は、そのような鏝也の作歌姿勢を想像させるもので、興味深い。

あやなくぞよしののおくもたづねけるつゆものどけしいせのはまをぎ 一五六

この歌も、先の二首と同様、「閑居百首」に収められているもので、同じく「吉野」と「伊勢」が対置的に詠まれている。これらの歌は、鏝也が自身の行迹——吉野での生活——を回想しているようにも受け取れるが、また、歌によって示される西行の行迹を、作歌することによって追体験しているようにも感じられる。

ともあれ、西行と鏝也の関係を考える上では二人の「伊勢」を詠んだ作品は見逃せない。そこでつぎに、『露色随詠集』の歌枕・地名歌の中から「伊勢」の歌を取り出して西行歌との関係を探ってみた。

鏝也の「伊勢」を詠んだ歌枕・地名歌は、先に掲げたものでも明らかに、相当数にのぼる。その中でも、

度会 ……一四三

神路山 ……四九三

五十鈴川 ……四九五

山田の原 ……五二、一四二、四六八、四七八

宮川 ……四六四、四七三

朝熊社 五三

（数字は歌番号）

などは、伊勢神宮（内宮、外宮）の神域もしくはその一帯を指す地名で、鏝也の伊勢信仰といった思想的側面の考察においても注目されるが、西行もまた実際に伊勢神宮の近くに住むという体験を通

してそれらの地名を詠み込んだ作品を残している。鏝也が右に掲げた地名を詠む際、先行歌としてあった西行歌の影響をどの程度受けていたのか、それを確認するために、以下、外宮（豊受大神宮）のある所一帯の地名である「山田の原」を詠んだものを見て行く。

みよしののおくのおくもなほ花もありやまだのはらはたすぎのかけ 一四一

右歌は先にも掲げたものであるが、傍線で示したように、「杉」を詠み込んでいることが注目される。鏝也にはこのほかにも、つぎのような歌がある。

かみさびて山だのはらのあやすぎは月のすみかのしるしなりけり 五二

右の二首は、ともに、「山田の原」に「杉」を詠んだものであるが、その取り合わせは常套的——例えば、「吉野」には「桜」、「龍田」には「紅葉」といったもの——とは言い難い。いったいに、「山田の原」という地名自体用例の乏しいもので、『平安和歌歌枕地名索引』では、十一例が引かれている。そのうち、「杉」が歌材として詠まれているものは三例で、鏝也の一四二番歌のほか（五二番歌は引かれていない）は西行歌の二例を見るのみである。

きかずともここをせにせん郭公山田のはらの杉のむら立

（御裳濯河歌合・十五番右）

万代を山田のはらのあや杉に風しきたててこゑよばふなり

（宮河歌合・一番左）

前者は『聞書残集』に「郭公」題で収められているもので、『新古今和歌集』にも巻第三・夏歌（二一七）として採られている。初夏の郭公の声を待つ心が主題として表現されているわけだが、

下句「山田の原の杉の群立」が印象的であって、郭公を待つひ

ろびろとした空間を背景に、自然のすがたが鮮明に感じとられる。したがって、声のあわれさを慕う心が一首の対象ではあるが、それを乗り越え包摂した、現実の自然そのものが、表現目的であるかのように感じさせられる。(窪田章一郎氏『西行の研究』^{注10})

とあるように、この歌の卓抜した点が下句の表現にあることは頷ける。だが、『御裳濯河歌合』の判者の俊成が「山田のはらといへる、凡俗及びがたきに似たり」と評しているように、斬新な下句が表現したものは、「山田の原」に鎮座している外宮、もしくはその神聖さを包摂したものであって、単なる「現実の自然そのもの」ではないだろう。「山田の原」という神域の清浄さを湛える地名を提示することによって、初夏の郭公の声を待つに相應しい清新な土地のイメージが生ずるのである。

そして、後者になるとそれは一層はつきりとした形で表現されている。『宮河歌合』の一番左に置かれたこの歌は、西行の外宮に対しての崇敬の念が披瀝されている。西行はその思いを、「山田の原」や、流れいでてみ跡たれますみづがきは宮河よりやわたらひのしめという歌(同・一番右)の「宮河」といった外宮の神域を示す地名を詠み上げることで表現している。

右の「山田の原」を詠んだ西行の二首がいずれも伊勢神宮に奉納することを目的として編纂された両宮自歌合のものであることを思うとき、二首には一般の地名歌には見られない信仰、思想といったようなものを汲み取らなければならないであろう。鏝也の五二番歌は、その西行歌によって示された神聖清浄な「山田の原」を「かみさびて」と受け、その「あやすぎ」を「月のすみかのしるし」と捉えているが、この「あやすぎ」も、ただに自然の景物としての「杉」ではなく、西行歌と同様に、「山田の原」に鎮座している外宮、もし

くはその神聖さをも象徴するものとして用いられていることは言うまでもない。一四二番歌の場合は、単に「山田の原」の実景を詠んだものとも理解されるが、やはりそこにも外宮の鎮座する土地という意識は存していたと思われる。

このように見てくると、鏝也が「山田の原」という地名を詠もうとしたとき、西行歌の「山田のはらの杉のむら立」、「山田の原のあやすぎ」という措辞とそれが表現する内容は十分に意識されるものであったことが明らかになると思われる。

しかし、それには鏝也自身の伊勢神宮に対する敬虔な信仰があったことも見逃せない。五二番歌の前後にはつぎのような歌が配されている。

かけまくもかしこきみよのそらはれてのどけき秋の月をみるかな 四九

かぜふかでつゆもやすみのみよなれなくさばのどけくすめる月かけ 五〇

しきしまのよるのみぎはののどけさに月やどしむるいせのはまをぎ 五一

あさくまやかがみのおもにかげみえてかみちのやまにありあけの月 五三

四九、五〇、五一番の三首は、いづれも伊勢神宮の神威によって保たれている「聖代」を詠んだものと思われ、

宮ばしらしたついはねにしきたてて露もくもらぬ日のみかげかな 新古今和歌集・一八七七

神ぢ山月さやかなるちかひありてあめのしたをばてらすなりけり (同・一八七八)

さやかなるわしのたかねの雲よりかげやわらぐる月よみのも

り

(同・一八七九)

という『新古今和歌集』に採られた西行の歌とも通い合うものがある。また、内宮の摂社の一つである「朝熊社」を詠んだ五三番歌も、

くもりなき鏡のうへにゐる塵をめにたててみる世とおもはばや

(御裳濯河歌合・三十五番左)

という伊勢神宮に聖代の再現を祈念しているような歌(『山家集』では雑歌に収められている)などが思い合われ、鏝也の伊勢神宮に対する篤い信仰の念を見て取ることができる。

鏝也のそのような伊勢神宮に対する崇敬の念が何に由来しているのかという問いは、ただちに解決できるものではないが、そこに伊勢神宮の神官たちを中心とする作歌グループの影響を認めることは可能であろう。『露色随詠集』には西行とも贈答を交わしている良良や『御裳濯和歌集』の撰者でもある寂延との贈答歌を見ることができ、これらの人物との関わりが鏝也の伊勢信仰に少なからぬ影響を及ぼしていると思われる。そしてそのような人物は、鏝也の歌に認められる西行歌の影響を考える上でも重要な存在であるだろう。

IV

ものへいではべるほどに、長延神主きたりてよめる

いけみづのなみにこがるもみぢばのいろにこころぞふかくそめぬる 二七六

かへりて、かへしに

やみのよにしきをあらふいけみづもきみがあやめにいろはますらん 二七七

これぞこのにぐりにしまぬはちすばとながむるまみにすめるいけ水 二七八

権禰宜長延もとより

人はいさまつともしらずやまざとのはぎはさやかにわれさそふかな 二九五

けさのあめにたへぞかねつるはぎの花つゆだにそでにうつすながめを 二九六

かへし

さらぬだにひとまつさとはくるしきにつゆふきかくるはぎのゆふかせ 二九七

はぎはなはいろこそまされけさのあめはきみまちなかねのたもとにぞふる 二九八

長延入道、おもひをしはべるとききて

よのなかのいろをあはれにいひなしてことわりなくもとはじとぞおもふ 三〇〇

『露色随詠集』には伊勢の歌人の名が散見されるが、右の歌によって知られる長延は、久保田淳氏^{注28}によって指摘されているように、『御裳濯和歌集』の撰者である寂延と同一人物である。長延は鏝也の計報を京の定家に知らせた人物としても知られているが、右の歌などからも二人の親密な間柄は窺われる。

この二人が歌人としてどのような間柄であったかは判然としないが、長延が文治二年に行われた二見浦百首の作者となつてゐることを考えると、長延は鏝也に作歌の指導をするようなことがあつたのかも知れない。先にも触れたように、長延(寂延)の撰になる『御裳濯和歌集』に鏝也の歌は二首採られているが、このことから推測しても長延が歌人としての鏝也に何等かの影響を及ぼしていたこ

とは疑いのないところである。

その長延が歌人としての西行を高く評価していたことは『御裳濯和歌集』に西行歌を最多の五十四首採っていることでも知れるが、

ちかくは西行といふものありき、ひごろ山の辺の露になれて、

心柿本の風にかよへり、草のむろを二見浦にしめて、詞の花を

内との宮にたむけたてまつる、これをわかちてふたまきとせり

という『御裳濯和歌集』の序文の記述からもそれは明白である。序

文の「ちかくは西行といふものありき」は、西行の行迹を近くで見

聞した事を示しているが、このように西行と関係のあつた長延と鏐

也が親しい間柄にあつたことは、鏐也の西行歌享受ということ考

える上で見逃せない。その意味で『露色随詠集』の伊勢の歌人たち

との関係を窺わせる贈答歌は注意して扱わなければならないが、こ

こでは長延とともに西行とも関わりがあつた氏良について見て行き

たい。

又、傍官禰宜のもとへ

月日すむみどりのみそらてらすらんとおもへばひとにまかせて

ぞ見る 四九六

返し 禰宜氏良

月日すむそらぞやさしきくらしとはきみもみやまのしひしばの

かけ 四九七

この贈答は、

ことわりのあることをあらぬさまになかひかれければ

伊勢宮へおくりはべる

あまてらすかみぢのやまにすめる月たかきひかりをあふぎてぞ

見る 四九三

あまてらす月日いたたくみやびとはよのことわりぞさやけかる
べき 四九四

いざこゆるいすずかはなみせをはやみはやくぞそのこがねし

るらし 四九五

という三首（身に降り懸かった疑義に対して、内宮の神や神官たち

だけは我が身の潔白なることを信じてもらいたいといった内容）に

続いて置かれているもので、おそらくこの贈答もそれと同時期に交

わされたものと思われ、氏良へ送った歌の上句は右の「あまてらす

かみぢのやまにすめる月」や「あまてらす月日」と同じく、永遠に

衰えることなく四方を照らし続ける伊勢神宮の神威を譬えたもので

あるだろう。

この氏良との贈答が何時のものであるのか判然としないが、伊勢

の宮に送った三首に付された「ことわりあることをあらぬさまにな

かひかれければ」という詞書は、鏐也の伝記上よく知られている室

生寺仏舍利事件^{注90}と関係があるもののように想像されるが、詳らかに

はしない。

内宮の禰宜のもとより

倫憑忠心雖待息間春秋空過、鬱望難休可思食出候歟とて

おとせねどおほかたひとはつらからであはれきみしもうらみら

るらん 五二一

かへし

おとはがはおとせぬきみが月日をばせぜにかぞへつつふちとな

るまで 五二二

この贈答も、氏良が鏐也に無沙汰を詫びた贈歌とそれに対して鏐

也が恨みを述べたもので、二人の関係が相当に親密なものであつた

ことを窺わせるものである。

贈答の相手である氏良は、『新古今和歌集』に、

五月雨の雲の絶え間を眺めつつ窓より西に月を待つかな

(夏歌・二二三)

という一首が採られた歌人で、『二十一代集才子傳』^{注9)}には「元満神主

之長子、…中略…氏良、叙正四位上、補一禰宜、稱家田。和歌一首、

載于新古今集。或云、千載集採載氏良之歌兩首。然不露其姓名矣。

^{見干御蒙}
灌集

ある弟の満良(蓮阿)らとともに西行に和歌の教えを受けた一人で、

そのような人物が鏐也の周辺にいたことは鏐也の歌における西行歌の影響を考える上で見逃すことができない。

氏良の名は西行の『聞書集』にも見え、

いせにて神主氏良がもとより、二月十五日の夜くもりたりけ

れば、まうしおくりける

氏良

こよひしも月のかくるるうきくもやむかしのそらのけぶりなる

らむ

(聞書集・一〇五)

かへし

かすみにしつるのはやしはなごりまでかつらのかけもくもると

をしれ

(同・一〇六)

という贈答を交わしたことが知られている。

この贈答は西行が晩年に伊勢に移り住んでいた時に交わされたものと思われるが、氏良の歌の「むかしのそらのけぶり」は、釈迦入滅時の月が雲っていたことを念頭に置いた表現で、西行もその氏良の歌を受けて二月十五日夜の月が曇る必然性を、あたかも氏良に教え諭すかのように、しかも美しく詠み上げている。今日、西行と氏良との関係を探る手掛かりとなるものはこの贈答だけであるが、「二月十五日の夜くもりたりければ」とあるように、二人にはこのほか

にも折々に歌のやり取りがあったものと思われる。ともあれ、伊勢居住中の西行に親近していた氏良と鏐也が親しい間柄であったことは鏐也の歌を捉える上でも注目されるが、『露色随詠集』にはつぎのような歌があり、右の贈答歌との関わりで注目される。

たきぎつきしけぶりやいまにのこらむはれてもくもるきさら

ぎの月

五

「月百首」に収められているこの歌は釈迦入滅時の月が曇っていたことに思いを寄せて詠んでいるが、鏐也の脳裡には右に掲げた贈答が想起されていたのではないだろうか。鏐也の仏教の教理經典に対する理解が相当なものであったことは先にも少し指摘したが、この歌を詠むにあたっては右の贈答が強く意識されていたように思われる。

一首は、二月十五日夜の月を詠んだものと思われるが、「たきぎつきしけぶりやいまにのこらむ」という上句は、氏良の「むかしのそらのけぶりなるらむ」と同じことを言い換えたものであろうし、また「はれてもくもる」とは、西行の「くもるとをしれ」を念頭に置いて表現されたものであるだろう。氏良から直接に右の西行との贈答などを聞かされていたのか、『聞書集』を見てそれを知ったのか、その辺の事情はまったく判らないが、鏐也は何等かの機会に右の贈答に接したものと思われる。結句の「きさらぎの月」は、有名な「ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎのもちづきのころ」という西行歌を踏まえての表現で、そこからも西行歌を摂取した痕跡は認められ、一首全体、西行を意識して詠まれたものと見てよいのではないだろうか。

はるをしるいろぞのどけきゆふがすみどりにすめるみか月の
かけ

「月百首」の最初に置かれた右歌も、

雲はるるあらしのおとは松にあれや月もみどりの色にはえつつ

(山家集・三六二)

や、

うづらふすかりたのひつちおひいでてほのかにてらすみか月の

かけ (山家集・九四五)

などの西行歌の措辞を取り入れて詠まれたもので、また、

ながむればやまのはごとにさきにけりはなまつころのみよしの
の月

七

も、

おしなべて花のさかりになりにけり山の端ごとにかかる白雲

(西行法師家集・五〇)

という西行歌の影響が考えられる。『千載和歌集』(春歌上・六九)に採られた右の西行歌は、また、『御裳濯河歌合』(三番左)に自撰して判者俊成に「左の歌、うるはしくたけたかくみゆ」、「こともなくうるはし」と高く評価されたもので、それに倣った鏝也の歌も長いものと言える。

このように、鏝也の歌には西行歌の発想や措辞に学んだと思われるものが多く存するのであるが、ここで注目したように、これには伊勢の地で作歌活動をしていた長延や氏良たちと鏝也が親しく接していたことが深く関係していたように思われる。右のことから、鏝也は西行の指導を受けた伊勢の歌人たちから作歌を学んでいたことが考えられ、鏝也の歌人としての位置を捉えようとする場合には、ただに定家との関係を指摘するだけでは不十分で、伊勢の歌人たちとの関係の解明が待たれる。

それでは、鏝也は一体どの時期に伊勢の地に関係する機会に恵ま

れていたであろうか。現在知られている資料ではそれを確認することは出来ないが、「…東大寺上人重源弟子空体^{宋人}」(『吾妻鏡』・建久二年七月二十三日条)とある俊乗房重源の存在は注目されてよいのではないだろうか。

およそ、重源は寿永、元暦、文治と続く平安時代の末頃、東大寺再建のための勧進に奔走していた。その重源の周りには彼との私的な関係によって結ばれた「弟子」「同朋」と称せられていた勧進集団が形成されていたことが知られているが、中ノ堂一信氏は鏝也をその一人と把握されている。それに従うと、鏝也は重源の命をうけて東大寺再建のための勧進にも協力していたことが考えられ、鏝也が伊勢の地を訪れた理由をそのあたりに求めることができるように思われる。重源は文治二年の春、東大寺造営の成功を祈願して伊勢神宮に参詣して、その神前で大般若経を転読しているが、その時に鏝也も一行とともに伊勢に下向したということが考えられる。とすると、鏝也は四十歳前後の時には既に伊勢の地と関わりがあったことになり、先の長延や氏良ともその頃に知遇を得ていたのかも知れない。

ともあれ、鏝也と伊勢の地との関わりを考える上では西行とも関わりがあった重源の存在は見逃せないが、これは本稿の意図するものではないので、以下のような仮説を提示するに止どめる。

V

最後に、『露色随詠集』に多く詠まれている「吉野」について、「閑居百首」の歌を中心に見て行く。

先に示したように『露色随詠集』の中で「吉野」は四十八首に見えるが、その大半の四十六例(うち一例、吉野川)は「閑居百首」

のもので、ここではその中でも西行歌との関係で内容的に注目されるものを幾つか取り上げてみる。

まず、本稿の冒頭でも『御裳濯和歌集』所収歌を挙げて指摘したように、「奥」という語が「吉野」に接続するかたちで使用されていることが注目される。

わがいりし心のほかのすみかな花にとはるみよしののおく

(御裳濯和歌集・春中・一二八)

としごとにと山の花に春くれてまだみよしののおくをみぬかな

(御裳濯和歌集・春下・一七三)

とことはにさくらはなをにほはせてここにすめるみよしののおく

一一三

かくれるむよしののおくをはなみにとこころふかくもわきておもふかな

一一四

ゆきふかきよしののおくにいへるしてすぎにしかたをゆめになさまし

一二〇

いったい、『露色随詠集』では「奥」と「色」という二語が多く使用されており、それが鏝也の歌の一つの特徴と言えるのであるが、「閑居百首」ではその「奥」は四十例に認められ、さらにその半数以上の二十三例が「吉野」詠に見られるもので、その用いられ方も注目に値する。

鏝也の「奥」という語の頻用については、寺島恒世氏「歌語『奥』^{注6)}」に論及されている。寺島氏は、その第一の要因を「西行を理想視するところ」に求め、「閑居百首」の歌を示して「閑居」百首を企て、このような歌を連ねるところには、『吉野の奥』を志向した西行を気取る鏝也の意図が透けて見えるように思われる^{注6)}（傍点、寺島氏。）と述べ、さらに第二の要因として定家との関わりを指摘され

ている。この見解は傾聴すべきもので、中世和歌を象徴する歌語「奥」の影響関係のみによって直接に西行と鏝也を結び付けることは出来ない。

だが、西行歌と鏝也の歌を比較した場合、その類似は否定しようのないもので、この「奥」という語とともに他の表現にも目を向けて鏝也の歌を見て行くと、そこには西行歌との密接な関係が認められる。

このもとをすみかにしめしあともではなにおもひいるみよしののおく

一一〇

さくらゆゑよしののおくもとほなるなり我がすむ山はしかもおとせず

一四七

わけいりしこころのほかのすみかなはなにとはるみよしののおく^{注6)}

一六三

右歌の傍線で示したように、鏝也は吉野山の奥が志向される理由を桜（花）に求めているが、これは先にも指摘したように、

よしの山おくをもわれぞしりぬべき花ゆゑふかくいりならひつ

(聞書集・一八七)

たにのまもみねのつづきもよしの山花ゆゑふまぬいはねあらじを

(聞書集・一八〇)

ときはなるはなもやあるとよしの山おくなくいりてなほたづねみむ

(聞書集・一八六)

という西行歌の発想や措辞に倣ったものと思われるが、そこには西行が志向したものを後追いするような鏝也の姿勢が表出されている。この「奥」という語の使用によっても明らかのように、鏝也の歌には根源的なものへと遡ろうとする志向が強く認められる。それは、

やまぢしるわれならなくはたれかみむよしののおくのおくのさ
くらは 一二八

ひととはばまたみよしののおくのおくにはなとよをへてをと
こたへよ 一六一

の「おくのおく」といった表現や、唯一「吉野川」を詠んだ

はなゆゑのなはながすともよしのがはそのみなかみにふかくす
みなん 一三〇

にも顕著に示されているが、これなども西行の

みなかみに花のゆふだちふりにけりよしののかはのなみのまさ
れる (聞書集・一三七)

を意識して詠んだものと考えられる。西行歌の「花のゆふだちふりにけり」は幻想的な情趣を湛えた表現で、そのイメージを提示すること「みなかみ」を志向する「心」が美的に捉えられているが、それを念頭に置いたと思われる鏝也の歌はただひたすらに根源的な「みなかみ」を志向する「心」が表出されているばかりで、先人西行を思慕する姿勢が全面に示されたものとなっている。

また、このような「奥」「みなかみ」を志向する「心」と同一な方向性を示すものは、

みやまべははなねにかへりこのはちるいづこのかげかこの身か
くさん 一八七

という歌にも認められ、傍線部「はなねにかへり」は殊に注目される。散った花が土に帰り、それが次の春の花となるといった季節の循環・自然の生命力を表現する「花根に帰る」も

ねにかへる花をおくりてよしの山夏のさかひに入りて出でぬる

(山家集・一四六二)

よしのやまくももかからぬたかねかなさこそは花のねにかへり

なめ

(聞書集・一三六)

春は猶よし野のおくへ入りにけりちるめる花そ根にそかへれる

(松屋本山家集)

ちる花もねにかへりてぞ又はさくおいこそはてはゆくへしられ
ね (聞書集・九九)

という西行歌に拠ったものと思われる。もつとも、「ねにかへる」は、花はねに鳥はふるすにかへるなり春のとまりをしる人ぞなき

(千載和歌集・崇徳院・一二二)

ねにかへる花をうらみし春よりもかた見とまらぬ夏のくれかな
(拾遺愚草員外・二六七)

などにも見られるものであるが、落花を惜しむ心を「このはちる」と山里の寂寥感へと転換させて「いづこのかげかこの身かくさん」と我が身の上を思いやっているとところなど、鏝也の歌には西行歌に通い合うものが認められる。そして「いづこのかげかこの身かくさん」という下句の表現は、

いづくにかみをかくさましいとひ出でて浮世にふかき山なかり
せば (西行法師家集・五四六)

の影響が考えられ、複数の西行歌の表現を繋ぎ合わせることで鏝也の一首が出来上がっていることが知れる。

さらに、根源的なものを追求する「心」を西行歌から発想を借りることで表現したものとして、つぎの一首を挙げることができる。

いにしへは花もこのよをいとへばやよしののおくにさきはじめ
けん 一四六

この鏝也の歌は、桜を人に擬したもので、人目を逃れるように吉野山の奥に咲く桜を思つて「いにしへは花もこのよをいとへばや」と理知を利かせているが、「いにしへは……さきはじめけん」という全

体の骨子は、俊成に「春のさくらをおもふあまり神代の事までたり」と評された

岩戸あけし天つみことのそのかみに桜をたれかうゑはじめけむ

(御裳濯河歌合・一番左)

の発想を取り入れたものと考えられるが、「奥」を追求する隠逸志向が花によそえて表現されており、内容的に面白い。この西行の歌は『御裳濯河歌合』の冒頭歌ということもあり、早くから注目され、

昔誰かかゝるさくらの花をうゑてよしのをはるの山となしけむ

(秋篠月清集・一)

と良経歌にも影響を及ぼしているが、^注西行にはこのほかにも吉野山に桜の根源を求めた

なべてならぬよもの山べの花はみなよしのよりこそ種はちりけ

め (御裳濯河歌合・四番左)

があり、鏝也はこの歌なども念頭に置いて作歌したのではないだろうが。

しをりせぬよしののおくのさくらばなながめてはるををしむも

かは 一六六

はながりとことづげにこそしをりつれこれよりおくはしるしよしなし 一四九

この二首に用いられている「しをり」は、『御裳濯河歌合』(三十番右)に自撰し、また『新古今和歌集』(雑歌中・一六四三)にも採られた

しをりせでなほ山ふかく分入らんうきこときかぬ所ありやと

(山家集・一一二二、西行法師家集・五四〇)

という歌や、先にも掲げた

よしの山こそしをりのみちかへてまだみぬかたのはなをたづ

ねん

(聞書集・二四〇)

などの西行歌に学んだものと思われるが、「枝折」する行為を不要のものとして拒絶しているところ^注なども西行歌に通うものがある。そして西行の「しをりせで」歌の第四句「うきこときかぬ」は、また、おほかたのうきこときかぬなにしおはばみみなし山にわれはすままし 一〇四

と、一首の重要な一句として使用されているが、

さらにさきはうきことをみぬ山もがなよしののおくもはなはちりけり 一六七

にも影響関係は認められる。

さらに、右の歌の第三句「山もがな」は特異な表現で、

ながめわびぬ秋よりほかのやどもがな野にも山にも月やすむらん (新古今和歌集・式子内親王・三八〇)

などに学んで創作されたものと思われるが、一首全体からは西行の「まだみぬかたのはなをたづねん」と同じ姿勢が窺え、鏝也の強い隠遁願望が見て取れる。

ひととはばまたみよしののおくのおくにはなとよをへてをとこたへよ 一六一

この歌は、自身を吉野山の奥深い所に住む者と捉えたものであるが、「ひととはば……とこたへよ」という措辞は、

山ざとはあはれなりやと人とはばしかのなくねをきけとこたへむ (聞書集・九四、西行法師家集・二六五)

浦島がこは何ものと人とはばあけてかひあるはことこたへよ

(西行法師家集・四三四)

と、西行歌に見られるもので、「閑居百首」には

みやこより我がすみかとしてたづねこばいはまうしとておくこと

たへよ

一八三

という類似表現も見られ、鏝也はおそらく西行歌からそれを学んだと思われるが、同じく西行歌の措辞を摂取したと見られる

やま里の春のあるじを人とはばおのがたづぬる花とこたへよ

(拾玉集・一三〇八)

という『花月百首』の慈円歌も念頭にあったことが想像される。

これまで、西行歌との表現上の類似ばかりを指摘してきたのでかえって見えにくくなってしまったが、鏝也の歌の根底には西行を思慕しその生き方に追従するような姿勢が認められることは見逃せない。鏝也にとって西行歌の発想や措辞に倣って作歌すること、西行の辿った跡を追体験することであつたと思われる。

あと見えぬこころのゆくへながむればおもかげたてるみよしの
のおく 一〇一

「閑居百首」の冒頭に置かれた右の歌は、鏝也自身の隠遁願望を表出したものであるが、これも

すずか山うき世をよそにふりすていかになりゆくわが身なる

らん (山家集・七二八、新古今和歌集・一六一三)

風になびく富士の煙の空にきえてゆくへも知らぬ我が心かな

(新古今和歌集・一六一五)

などに代表される我が身と我が心の行方を生涯追い続けた西行のそれを意識したものであるだろう。「こころのゆくへ」とは花に憧れて彷徨う「浮かれ出づる心」の行方を捉えたものであろうが、「あと見えぬ」という初句からの続きを考えればこの「こころのゆくへ」は、先人として敬慕する西行のそれを指しているように思われる。「西行が詠み置いた歌によって西行の心の行方を辿ってみると吉野山の奥の面影が慕わしく思われることだ」というふうに解釈すれば、西行

への挨拶性もあり、「閑居百首」の冒頭にこの歌を据えた鏝也の意図も汲み取れるのではないだろうか。

このように冒頭の一首を捉えようと、つぎに配されている

たのめつつよしの山ぢおもひいりてはなよりおくにすむこ
ろかな 一〇二

の「たのめつつ」も、「西行の歩んだあとを頼みとして」と解することができ、このようなところからも鏝也の西行を思慕する姿勢が見て取れるのではないだろうか。以下、「閑居百首」は、

よしのやままなくもかよふこころかなあだなるはなのいろし
がほに 一〇三

おほかたのうきときかぬなにしおはばみみなし山にわれはす
ままし 一〇四

とただちに西行歌を想起させる歌が続いて行くが、最後の

このもとにすみていまはおもふかなはな見がてらに人やとひ
こん 二〇〇

まで、そのほとんどが西行歌の発想や措辞を取り入れたと思われるもので、「閑居百首」という試み自体、西行を追慕する目的で企てられたものであることが知れよう。

以上、西行歌との関わりにおいて発想や措辞の点で注目される歌を「閑居百首」の中から取り出して見てきたが、それによっても鏝也の歌の特質がいくらか明らかになったと思う。

「閑居百首」には全体にわたって西行歌の影響の跡が認められたのであるが、このことから鏝也の西行歌に対する理解が相当に深いものであったことが知れる。鏝也の西行歌の取り入れ方はかなり大胆なもので、専門歌人と比較すれば確かに鏝也のそれは稚拙なもの

と言える。しかし、右に指摘した「しをり」、「(はな)ねにかへる」、「うきこときかぬ」、そして「ひととはば……こたへよ」などといった西行歌に独自の発想や措辞を、鏝也が積極的に享受し、自歌に取り入れようとしたことは評価してよいであろう。

全体的な印象からすると、「閑居百首」は、「西行(歌)」をとぶらうて」といった性格を有しており、『古今和歌集』の歌を踏まえて詠まれた「古歌をとぶらうて」と同じような方法―この場合は特定の一首というわけではないが―で詠まれたのではないかとも考えられるが、それはただに西行歌の表現を学ぶためのものではなく、なかつたであろう。鏝也にとって、西行歌に学んでその発想や措辞などを取り入れて作歌するということは、先人として思慕する西行の「生」を辿ることであり、また、西行に憧れてそれに追従しようとした鏝也自身の「生」を表現することであつたのではないだろうか。

おわりに

『露色随詠集』の歌について、西行歌との類似に注目して、その影響関係を見てきた。ここでは明瞭に影響関係が窺えるものを中心に取り上げて見てきたが、『露色随詠集』にはこのほかにも発想、措辞、また素材において西行歌と共通するものが多く存している。その中には、単なる西行歌の表面的な焼き直しとしか思われない歌も見られるが、一方で西行歌と並べてみても遜色のない歌があることも否めない。ただ、「詞」も「心」も西行のそれに拠つたためか、西行歌を一步でも超えるものは見受けられない。西行歌を摂取して詠まれた鏝也の歌が「西行的和歌」であつたところに、鏝也の歌人としての限界が示されているように思われる。

ともあれ、「静原」や「高野」など、およそ一般の歌人であれば関心を示さずに見過ごしてしまうような地名に鏝也が関心を示していることなどは注目してよいであろう。そのことによって、鏝也は隠遁生活にかなりの関心を示していたことが知れるが、鏝也が西行歌から享受したものは、隠遁生活者の感慨ではなかつただろうか。

従前の研究では、鏝也は「地方歌人」とか「素人歌人」といったふうに捉えられていた。もしそうであるとすれば、そのように位置付けられる歌人が専門歌人の歌をどのように摂取しているのかを確かめることは、興味深いことである。また、そのことから逆に影響を与えた歌人の歌の特質を知ることにも出来よう。本稿においては、西行歌との関係に絞って捉えてみたが、定家をはじめとして、慈円、良経といった九条家の歌人など、さらに範囲を広げて見て行く必要があるだろう。

鏝也という人物について、今日知られていることは、彼の伝記上のほんの一、二にすぎない。鏝也の歌を理解する場合、彼の生活の実態を少しでも明らかにして行くことが必要と思われる。その意味でも、鏝也と交渉のあつた人物―『露色随詠集』に名を留めている人物、そして重源など―との関係を含めたさまざまな角度からの考察が今後期待される。

注

- (1) 『時雨亭文庫』一(昭和17年11月、教育図書)に所収。
- (2) 『新古今世界と中世文学』下(昭和47年11月、北沢図書出版)に所収。
- (3) 注(2)石田氏論文、一四七頁。
- (4) 例えば、『和歌大辞典』は次のように解説している。

鏝也^{ばんや}「平安・鎌倉期歌人」久安五十二―寛喜二1230年、八二歳。伝未詳。空休房と号した。高野山の僧か。新勅撰集に一首入集。定家との交渉が深く、伊勢関係の歌も多い。古今集を下敷にした百首など技巧的習作を残す。家集に『露色随詠集』がある。(松野陽一氏)

(5) 『田^織佛教語辞典』(新訂重版)

(6) 久保田淳氏編『西行全集』による。以下、『松屋本山家集』の引用は同書による。

(7) 久保田淳氏『花のもの言う―四季のうた―』(昭和59年4月、新潮社)には、

空休房鏝也の家集『露色随詠集』には、西行の歌を模倣したことが明白な歌が二、三に止まらないのである。ということは、空休房は西行の和歌の早い愛読者の一人であり、…
という指摘がある(一四七頁)。

(8) 注(2)石田氏論文、一四三頁。

(9) 「西行と隆信」(中世文学研究、第11号、昭和60年、8月)、「西行と新古今歌人」(『論集西行』、平成2年9月、笠間書院)など、参照。

(10) 注(9)稲田氏「西行と隆信」には、「露にしとどに濡れた野原が、どこまでも遠く続くイメージを喚起させる表現として、この『宮城野の原』は、歌人たちの関心を集めた表現だったようである。」という指摘がある。

(11) 注(1)冷泉氏解題、参照。

(12) そのかたとゆくへしらるるはるなればせきすゑてましかすがののはら(相模集、一三)

(13) 霞たち消えあへぬ雪も白砂の梅がかにほふかすがののはら

(皇太后宮大夫俊成女、四)

消えあへぬ雪ぞひまなき若菜摘むそでさへいろを春日ののはら

(14) 『角川日本地名大辞典』25、京都府上巻より引用。(源具親、九)

(15) 『丹後守為忠朝臣家百首』には、「深山炭籠」題のしづはらやひらまつやまのすみがまはけぶりたえせでとしぞへにける
(五三八)

が見出だせる。

(16) 注(2)石田氏論文、一四三頁。

(17) 引用は『西行法師家集』によった。『山家集』では初句「しをりせじ」。

(18) 久保田淳氏「西行の『うかれ出る心』について」(国語と国文学、第42巻第3号、昭和40年3月)参照。

(19) 『新古今歌人の研究』(昭和48年3月、東京大学出版会)に所収。引用の三首がともに恋百首和歌のものであることも留意される。

また、「うかる」に類似した語である「あくがる」も、
いつよりもあくがれいづるころかなみそらの月もいさなふなく
に
(三〇六)

と用いられている。

(20) 『千載集』あたりからの使用が目立ち、『新古今集』に至ってその用例は急増する。

(21) 久保田淳氏は、この歌の参考歌として、西行の
山ふかみまきのはわくる月かげははげしきものすこきなりけり
(山家集・一一九九)

を指摘されている。(国文学、第35巻14号、平成2年12月)

(22) 白田昭吾氏「西行の花と月の歌」(『論集西行』、平成2年9月、笠間書院)等参照。

(23) 岩波文庫『法華経』下による。

(24) 『新修大蔵経』第三十四巻教疏部二による。

(25) この歌は『西行法師家集』の「追而加書西行上人和歌次第不同」と

記された箇所に見られる。

また、この歌は『詠太神宮二所神祇百首和歌』（『群書類従』第二輯所収）にも引かれている。

- (26) 窪田章一郎氏『西行の研究』（昭和36年1月、東京堂出版）、四八八頁。

- (27) 拙稿「西行の両宮自歌合について―編纂の意図を中心に―」（上田女子短期大学紀要、第12号、平成元年3月）参照。

- (28) 久保田淳氏『御裳濯和歌集』撰者叔延について（国学院雑誌、第89巻第1号、昭和63年1月）

- (29) 『明月記』寛喜二年二月三日条

注(2)石田氏論文に詳述されている。

- (30) 山岸徳平氏編『八代集全註』3に所収。

- (31) 中ノ堂一信氏「東大寺大勧進職の成立―『俊乗房重源』像の再検討―」（日本史研究、一五二号、昭和50年4月）参照。

- (32) 寺島恒世氏「歌語『奥』考」（国語国文、第56巻第10号、昭和62年10月）

- (33) 注(33)寺島氏論文、三七頁。

- (34) この歌は、

わがいりし心のほかのすみかな花にとはるみよしののおく

（御裳濯和歌集・春中・一二八、先掲）

と初句の異同は見られるものの同一歌と見做してよいだろう。

- (35) 稲田利徳氏『西行と良経』（中世文学研究、第13号、昭和62年8月）参照。

- (36) 稲田利徳氏「西行の『枝折』の歌の系譜」（岡山大学教育学部研究集録、第83号、平成2年3月）参照。

- (37) 『西行法師家集』（九一）にはつぎの歌が見られる。

何とかくあだなる花の色をしも心にふかくおもひそめけん

『山家集』では第二句「あだなるはるの」、結句「そめはじめけん」

とある（一五三番歌）。

- (39) 稲田利徳氏「西行の和歌表現―『うがほ』をめぐる―」（中世文学研究、第7号、昭和56年8月）参照。

*『露色随詠集』の歌をはじめその他特別に注記を施していない歌の引用はすべて『新編国歌大観』によった。歌に付した番号もそれによった。